

HOWS 通信

(6/6) 戦争とカニバリズム

日本軍による人肉食 事件が問いかけるもの

講師＝永尾俊彦

講師の永尾氏は毎日新聞の記者時代の一九九四年から九五年にかけてこの問題（日本軍による人肉食事件）を取材した。取材の動機は、この事件からアジア太平洋戦争を遂行した日本帝国主義の軍隊「皇軍」の本質がさぐれるのではないかと直感した（仮説を立てた）からだという。今講座での報告は、具体的史実に即した実証的観点からも戦争責任を問うアプローチの確かさからも氏の直感・仮説の正しさを立証するすぐれた内容だった。永尾氏は当時この取材をまとめた著書を上梓するが、それに対する反応が書評等を含めいっさいなかったことも話された。従軍「慰安婦」や沖縄戦など同じ日本の戦争責任を追及するテーマと比べこの問題が日本社会でほとんど顧みられないことがない状況についても言及され、埋もれてしまっているこの重大な問題を一人でも多くの人に知ってほしいと訴えた。

(6/9) 連続講座「侵略国家アメリカその歴史と現実」

講師＝富山栄子

米国ミネソタでの白人警官による黒人男性の暴行死を契機に全世界で抗議デモが広がるなか、アメリカ史をたどる連続講座の第一回「アメリカ合衆国の成立」が開催された。富山さんは一四九二年のコロンブスによる「発見」以来、アメリカは事実上戦争状態にあったと語る。富を求めて来た欧州人による植民地戦争と先住部族間の代理戦争そして疫病による先住民の人口激減から、英・スペイン両王室の覇権争いと独立戦争を経て、メキシコとの領土獲得戦争へと至る、絶え間のない戦争の歴史だった。それはアフリカ系・ラテン系・先住アメリカ人への虐殺と搾取の歴史でもあった。七月七日（火）開催の第二回「アジアへの侵略と戦争」への参加を呼びかける。

(6/20) 社会主義運動と国際連帯の必要性 | 世界民青連での二〇年

講師＝近藤和樹

近藤氏は社会主義青年同盟の委員長で、長年にわたり世界民主青年連盟（民青連）の活動にもその中心メンバーとして携わってきた。報告は、氏のプロフィールの紹介からはじまり、父親が国労組合員で国鉄闘争にも参加、子どもの頃から集会などに連れていかれたこと、社青同に参加した大学時代のことなどが語られた。民青連の活動をとおして日本の運動の問題点も見えてきた。反核運動では「ヒロシマ・ナガサキ」の被害性だけを訴え日本による侵略＝加害性を問題にしてこなかったことが問われるべきだ。日本の運動が国際的視点や視野をもつことは非常に大切で運動の質そのものをも規定する。かつてあった社会主義へのアレルギーは薄れ日本でも世界でも社会主義に関心を持つ青年がふえている。こうした指摘は重要で大変参考になった。

（『思想運動』1054号 2020年7月1日号）